

史跡興福寺旧境内の発掘調査

法相宗大本山 興福寺
独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所
都城発掘調査部(平城地区)

調査地:奈良市登大路町48番地

調査期間:2025年7月7日(月)~7月31日(木)

調査面積:約52m²

調査終了後のため、現地公開はありません。

概要

創建期興福寺の西不開門(にしあけずのもん)の凝灰岩製基壇外装を検出しました。西不開門の一部を確認したのは、今回が初めてです。また、これにより西不開門、および興福寺境内西辺の位置に関わる情報も取得できました。

さらに、興福寺創建時あるいは平城京造営時に施された可能性がある整地層を確認し、興福寺創建前後の造成事業に関する知見を深めることができました。

1. 調査の経緯と目的

これまでの調査成果

興福寺は、天智天皇8年(669)に鏡女王が夫・藤原鎌足の病氣平癒を祈願して建立した「山階寺(やましなでら)」を起源とします。その後、山階寺は飛鳥に移り、「廄坂寺(うまやさかでら)」と改称されます。さらに、和銅3年(710)の平城京遷都にともない現在の地に移転し、「興福寺」と名付けられました。奈良時代には四大寺、平安時代には七大寺の一つに数えられ、現在は法相宗の大本山となっています。

今回の調査地は、興福寺境内地の西端南寄りに位置します(図1)。この地は、興福寺旧境内の西面に3箇所設けられた門のうち、南の門の想定地付近に当たります(図2)。詳細は後述しますが、この門は「西不開門(にしあけずのもん)」と称されていました。

この西不開門については、これまでそれに直接関わる遺構が確認されておらず、その実態や正確な位置などはあきらかではありませんでした。

興福寺旧境内の西辺周辺での発掘調査としては、1987年に奈良県立橿原考古学研究所がおこなった調査が挙げられます。この調査では、西面中央の門の一部を検出したのに加え、門の雨落溝の

側石に凝灰岩製の切石が用いられていることを確認し、それが興福寺創建期に遡る可能性を指摘しています。また、1985年に奈良国立文化財研究所がおこなった平城第164-3次調査でも、興福寺西限を示す可能性がある南北溝1条を確認しています。ただし、いずれも部分的な検出に留まるため、創建期興福寺西辺の正確な位置は確定できません。

調査の目的と概要

今回の調査は、興福寺の倉庫の除却および管理棟兼倉庫の新築にともなうものです。2024年11月に倉庫の除却工事にともない立会調査を実施したところ（平城第2024-19次）、奈良時代に属する可能性がある凝灰岩製の切石列を検出しました。重要遺構と目されるため、詳細の確認を目的として、改めて発掘調査を実施することとしました。

調査区は東西17.4m×南北2.3～3.3m、調査面積は約52m²です。2025年7月7日(月)に調査を開始し、同月31日(木)に終了しました。

西不開門について

18世紀の成立とみられる「奈良町絵図」（天理図書館蔵）では、今回の調査地付近に門が描かれ、また「西不開門」との注記があります。ここから、当地に門が設けられていたこと、それが「西不開門」と称されていたことが知られます。また、近世後期の成立とみられる興福寺所蔵古図では、この門を八脚門として描いており、また「ハッ足門」と記していることから、西不開門は八脚門であったと考えられます（図3）。

文献では、平安時代末～鎌倉時代前期の成立とみられる『興福寺流記』に、伽藍西面の門について「西二字。〈各三間。南一宇不開之。〉」との記述があります。ここから、西不開門が創建当初より桁行3間の規模を有していたこと、古代にはすでに「不開」の門と認識されていたことが知られます。また、延慶2年（1309）成立の『春日権現驗記絵』の詞書では、西不開門と東西対称の位置に所在する東不開門を「あけずの門」と記しています。奈良の郷土史家・村井古道が元文5年（1740）に草した『南都年中行事』でも、西不開門の「不開」に「アケズノ」と注記しているとみられます。これらから、「不開門」は「あけずの門」と読まれたことがわかります。なお、18世紀頃の成立とみられる『興福寺濫觴記』には、西不開門の桁行・梁行寸法と高さが記されています。それによれば、近世の西不開門は東西（＝梁行）3間1尺（＝20.5尺、約6.2m）、南北（＝桁行）5間9寸（＝33.4尺、約10.1m）、高さ2間8寸（＝13.8尺、約4.2m）の建物規模を有していました。

2. 主な検出遺構

主な検出遺構は、以下のとおりです。

凝灰岩製基壇外装　調査区西部で、南北方向の凝灰岩製切石列を検出しました（図4～6）。東西幅約18cm、南北長約50cm、高さ約15cmの凝灰岩製切石を隙間なく6石並べており、一部ではその上に、やや薄手の切石が若干西側にずらして据えられています。検出位置と設置状況から、こ

これらの石列は西不開門の基壇東面の外装材であり、下段が地覆石、上段が羽目石の下端部にあたるものと考えられます（図7参照）。凝灰岩は二上山産とみられることから、興福寺創建期の遺構と判断できます。

なお、この凝灰岩製基壇外装の西側は西不開門の基壇想定地に当たりますが、現代の攪乱が複数重なり合いながら掘り込まれていました。そのため、門の基壇土は完全に削平されているとみられ、礎石の痕跡等は確認できませんでした。

一方、この門基壇想定地では、拳大の礎を多量に含む褐色粘土や褐色土の整地層を確認しました（図4・5）。両者の土質はやや異なるものの、いずれも粒子は精良でよく締まり、遺物はまったく出土しませんでした。また、褐色粘土は東から西に向かって緩やかに下っています。このような特徴から、この整地層は興福寺の創建時、あるいはそれに先立つ平城京の造営時に平地を造成するために施されたものである可能性があります。

南北溝 凝灰岩製基壇外装のすぐ東側で、東西幅1.3～1.8m、深さ約20cmの南北溝を検出しました（図4・5）。現状での埋土（明褐色土）は基壇外装の地覆石に覆い被さっており、また一部にコンクリート片を含みます。そのため、埋土自体は現代の造作によるものとみられますが、その位置からは西不開門の雨落溝を踏襲した溝である可能性が考えられます。

3. 主な出土遺物

今回の調査では、土器類（土師器・須恵器・瓦器・陶磁器）、瓦類、木器などが出土しました。瓦類には、軒丸瓦7点、軒平瓦5点が含まれます。

4. まとめ

（1）興福寺創建期の西不開門を初めて確認しました

今回の調査で検出した凝灰岩製切石列は、検出位置と設置状況、および凝灰岩が二上山産であることから、興福寺創建期の西不開門の東面基壇外装（地覆石・羽目石）と判断できます。西不開門の一部を確認したのは、今回が初めてです。西不開門の実態に迫る重要な成果といえます。

（2）西不開門、および興福寺境内西辺の位置に関する情報を取得しました

上述の凝灰岩製基壇外装を検出したことにより、西不開門、および興福寺境内西辺の位置に関する情報を取得できました。興福寺旧境内の敷地構成等の復元に資する貴重な成果となります。

（3）興福寺創建前後の造成事業に関する知見を得ました

西不開門の基壇想定地では、拳大の礎を多量に含む褐色粘土や褐色土の整地層を確認しました。この整地層は、興福寺創建時あるいはそれに先立つ平城京造営時の造成にともなうものである可能性が考えられます。興福寺創建前後の大規模な造成事業に関する知見を深めることができました。

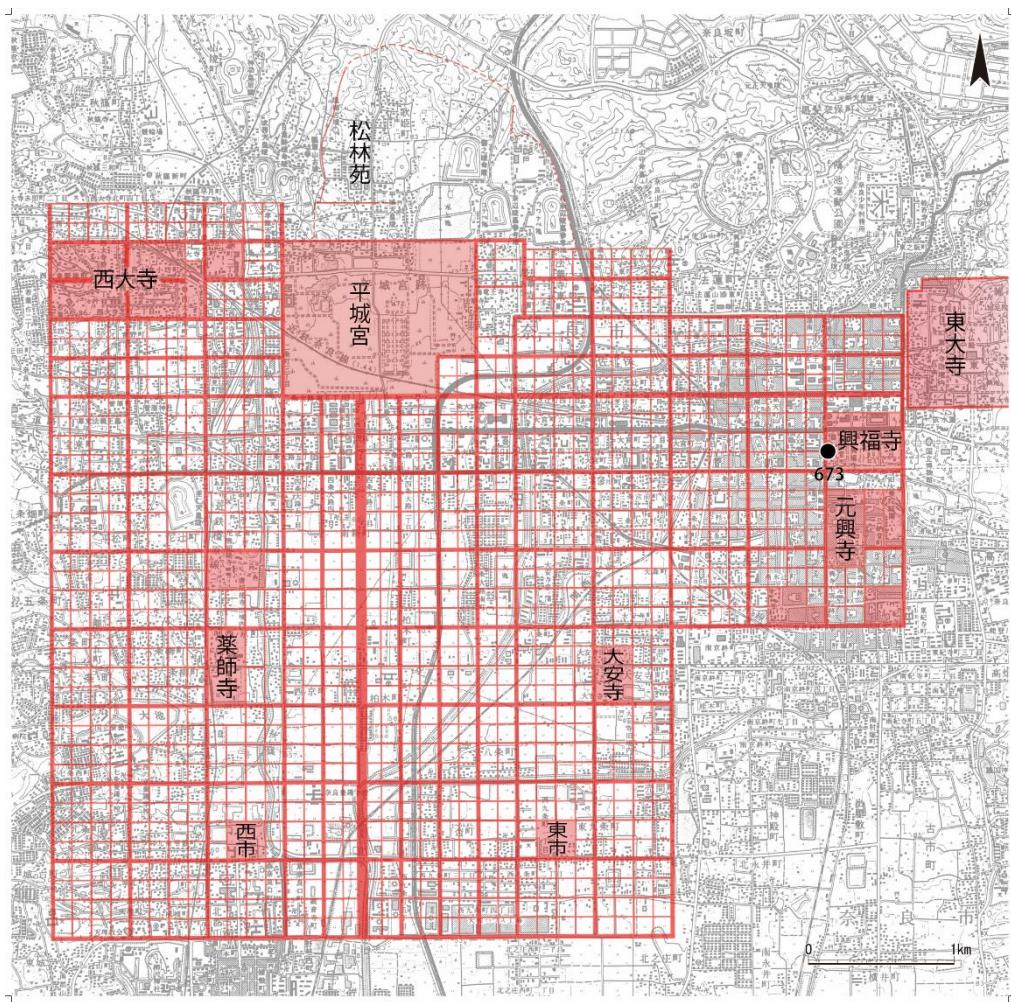


図1 調査位置図（広域） 1:50000

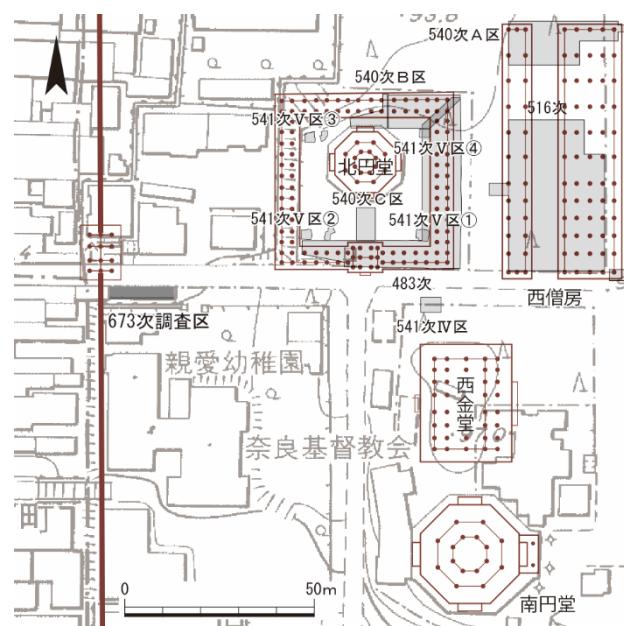
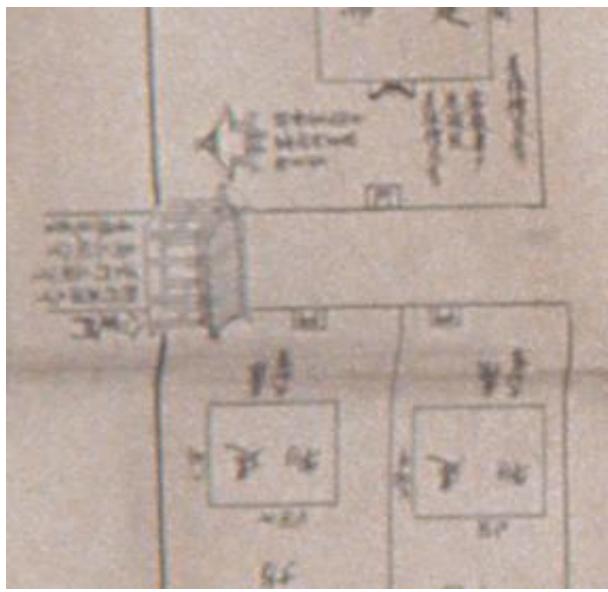
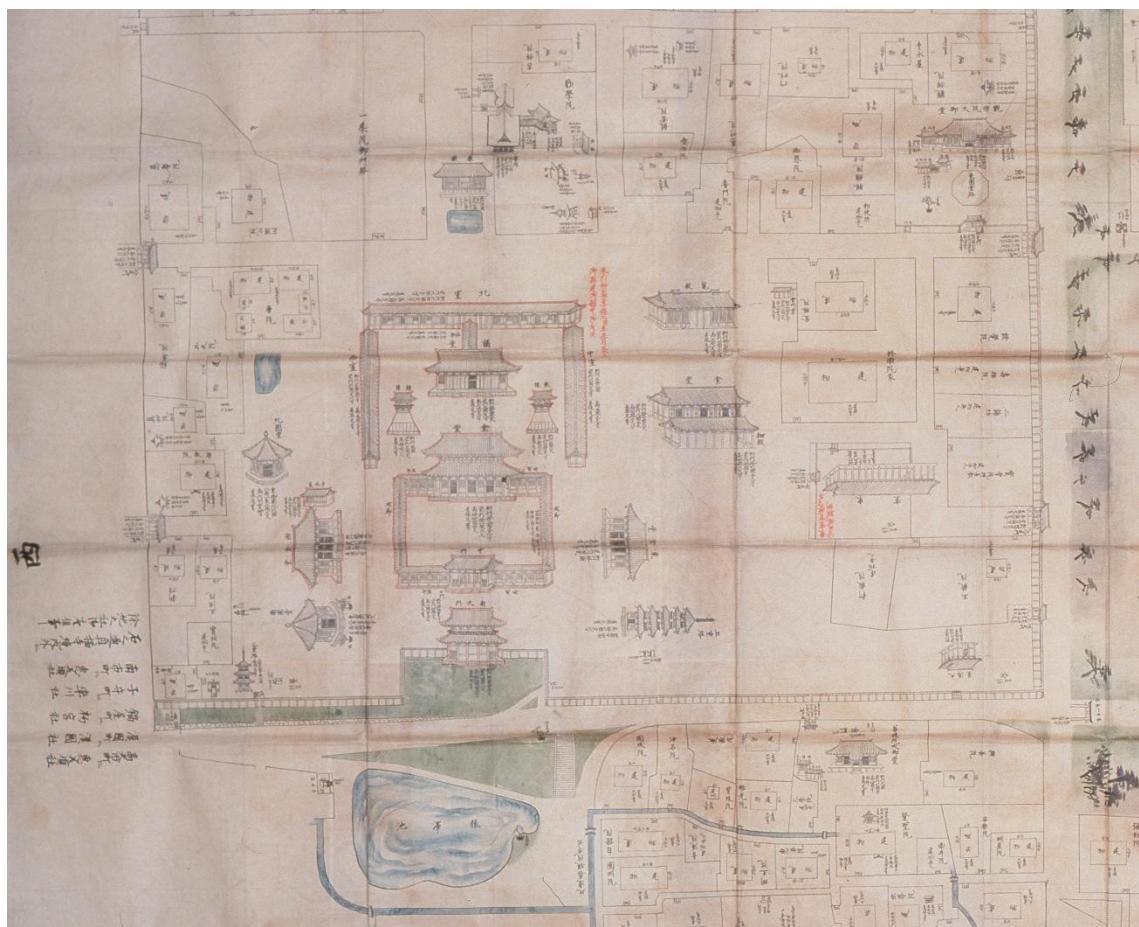


図2 調査位置図（調査区周辺） 1:2000



西不開門部分拡大

図3 興福寺所藏古図(部分)

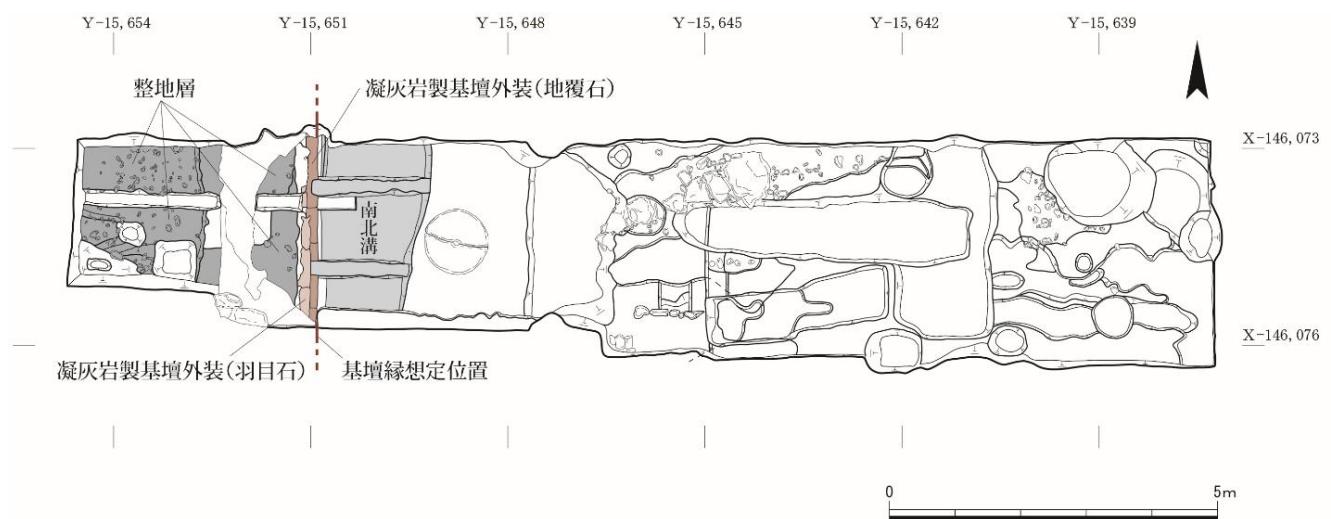


図4 第673次調査区遺構平面図 1:120

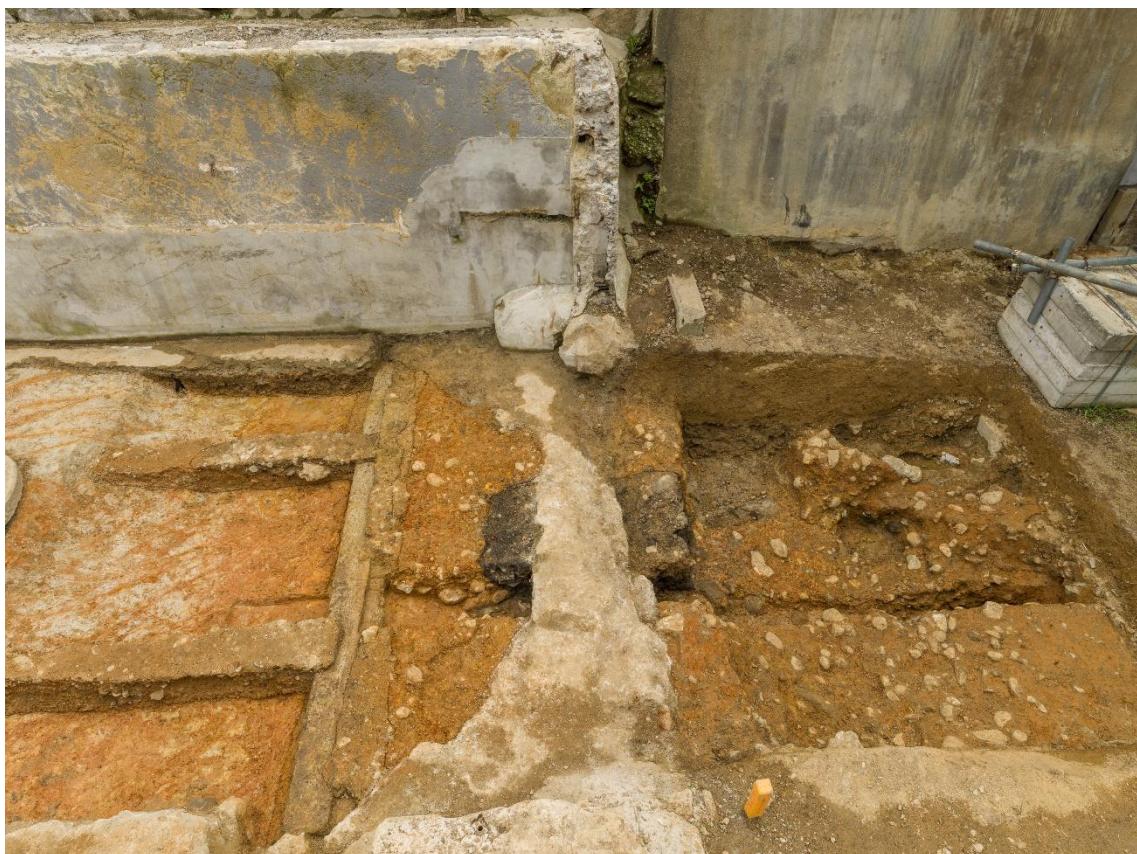


図5 凝灰岩製基壇外装・南北溝および整地層検出状況（北から）



図6 凝灰岩製基壇外装（地覆石・羽目石）検出状況（東から）

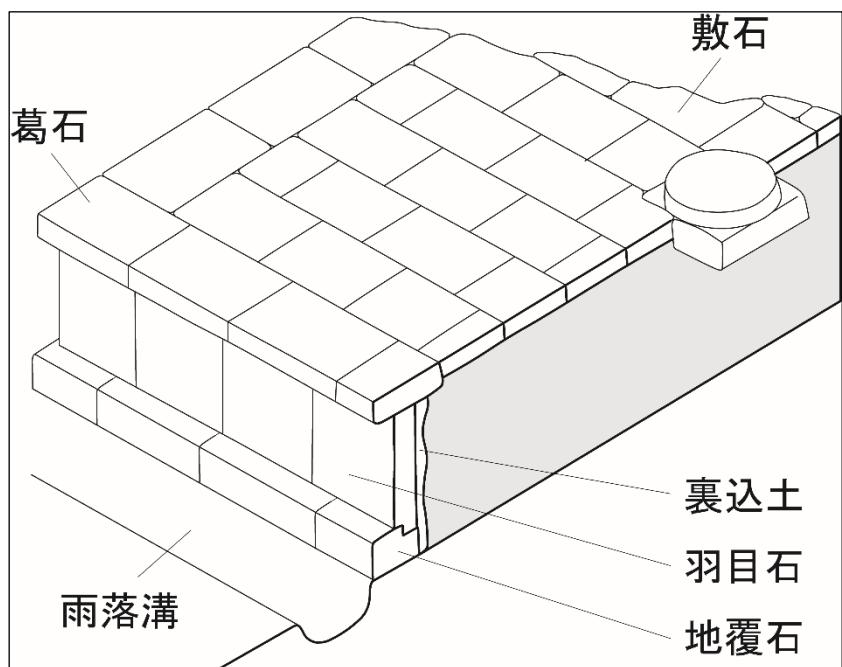


図7 基壇外装模式図